

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

カリキュラム委員会
(責任者名) 小玉 智治 (役職名) カリキュラム委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	「データサイエンスⅠ」(令和5年度前期1年次に開講) 科目担当者: 益満、末永 履修者 生活学科生活学専攻 35名、こども学専攻 3名、食物栄養専攻 17名、合計55名 英語科 22名 計77名(全員、単位を修得し、修了要件を満たした) 履修登録率 全1年生における履修者の占める割合 58.3%
学修成果	「データサイエンスⅠ」においては、到達目標(学修成果)として次の3つをシラバスに示している。 また、学期末の単位認定試験は、この3つ到達目標の到達度を図るものとするを単位認定規程に定めている。 単位認定試験の結果、「秀(90～100点)」が10.4%、「優(80～89点)」が42.9%、「良(70～79点)」が36.4%、「可(60～69点)」が10.4%であった。 このことから、同科目が定めた到達目標に多くの学生が概ね到達しており、一定の学修成果を得たものと判断している。 「データサイエンスⅠ」において設定した到達目標 到達目標①「社会で活用されているデータ及びそれを利活用するための技術の概要を理解している。」 到達目標②「機械学習を中心としたAI技術を理解し、AIによって何が可能になるか、社会にどう影響するかを説明できる。」 到達目標③「データ駆動型社会におけるリスクやモラル・倫理を理解し、データ・AIを社会に役立てるための自らの振る舞いについて考察できる。」
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	「データサイエンスⅠ」の3つの到達目標について、授業アンケートにより「a.求められるレベルに十分到達した」(以下「a.十分」)、「b.求められるレベルの少し手前まで到達した」(以下「b.概ね」)、「c.あまり到達できなかった」(以下「c.未到達」)の3段階で履修者自身の到達度(自己評価)を尋ねている。その結果、次のとおりであった。 到達目標①「社会で活用されているデータ及びそれを利活用するための技術の概要を理解している」(a.十分:33.3%、b.概ね:58.3%、c.未到達:8.3%)。 到達目標②「機械学習を中心としたAI技術を理解し、AIによって何が可能になるか、社会にどう影響するかを説明できる」(a.十分:40.3%、b.概ね:52.8%、c.未到達:6.9%)。 到達目標③「データ駆動型社会におけるリスクやモラル・倫理を理解し、データ・AIを社会に役立てるための自らの振る舞いについて考察できる」(a.十分:40.3%、b.概ね:54.2%、c.未到達:5.6%)。 いずれの到達目標も概ね9割以上の受講生が到達していると評価しており、授業内容に対する理解度は高いと判断する。 また、学修態度を尋ねる質問に対しては、「a.全体を通して、意欲的に取り組むことができた」が75%、「b.半分程度の割合で、意欲的に取り組むことができた。」が23.6%、「全然、意欲的に取り組めなかった。」が1.4%であった。学生の多くが意欲的に学んでいたことが伺える。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	前期に開講した「データサイエンスⅠ」に引き続き、後期に「データサイエンスⅡ」(演習科目)を開講した。 全学科・専攻から、44名の学生が履修しており、その内、約6割の学生が「データサイエンスⅠ」の履修者であった。 このことから、後輩等他の学生への推奨度は高いと推察している。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	授業アンケートの結果及び科目担当者の自己点検・評価報告に基づき、カリキュラム委員会において点検・評価を行い、新年度以降のカリキュラムに反映させることとしている。 また、「データサイエンスⅠ」を開講している総合人間科目の年度当初に行われる履修指導時において、科目の概要を説明し履修登録を促すこととしている。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和5年度から開講したため、卒業生は出ていない。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	教育プログラム内容・手法等への意見聴取は、令和6年度の外部評価委員会で実施予定である。 なお、「データサイエンスⅠ」及び「データサイエンスⅡ」では、データサイエンスの学びを深めるために、外部講師による講義も導入した。外部講師は、東京の東急株式会社及び本県在住の元九州富士通に勤務していた方を外部講師として呼びびて授業をお願いするとともに今後の授業に向けた助言をいただいた。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	Google Formsによるアンケート調査において、「授業が楽しかったか」について回答を求めたところ61人が回答した。「5.大変楽しかった」「4.かなり楽しかった」「3.ふつう」「2.あまり楽しみでなかった」「1.まったく楽しみでなかった」の5段階では、順に、37人(60.7%)、14人(23.0%)、9人(14.8%)、1人(0.02%)、0人(0.0%)であった。この結果より、約8割以上の受講生が学ぶことの楽しさを感じていたことがわかる。 また、「授業は充実していたか」について回答を求めたところ61人が回答している。上記の5段階の順に、37人(60.7%)、16人(26.2%)、8人(13.1%)、0人(0.0%)、0人(0.0%)であった。この結果より約9割の受講生がかなり充実した授業と評価している。 学ぶことの意義については、全授業回で意識して学生に伝えてきたことであり、そのことは、授業アンケートや単位認定試験の結果が良好であったことから、十分学生に伝わったものと考えている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	講義では、ワードで作成された「配付資料」をプロジェクターに投影し、テキスト部分はAIによる読み上げを行っている。この配付資料は、教科書の内容を短文でまとめたものである。専門用語などが【 】として空欄で示されており、ここに専門用語などを記述することで文章を完成させるものである。この資料は授業内容を要約したものでもあり、1講義でA3表裏1枚程度の分量として受講生の負担の軽減を図っている。 また、この配布資料は、Google Classroomにも置き、穴埋めの回答を聞き漏らした学生に配慮するとともに復習の教材としても活用してもらっている。 このほか、授業中、Google Formsによる質問等を行い、結果をプロジェクターに投影したり、グラフによる視覚的結果を示したほか、自由記述部分は、AIによる読み上げ機能で受講生と共有し、多様な意見があることを学ぶ機会としている。 このような工夫を実施した結果、前述したとおり、約8割以上の受講生が学ぶことの楽しさを感じていたことがわかる。 科目担当者に対しては、引き続き、授業改善をお願いしたい。